SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

逆転のトライアングル

2022年／スウェーデン・ドイツ・フランス・イギリス映画
配給：ギャガ／147分

2023（令和5）年2月25日鑑賞　TOHOシネマズ西宮OS

Data　２０２３－３０

監督・脚本：リューベン・オストルンド
出演：ハリス・ディキンソン／チャールビ・ディーン／ウディ・ハレルソン／ドリー・デ・レオン／ヴィッキ・ベルリン／ヘンリク・ドルシン／ズラッコ・ブリッチ／ジャン＝クリストフ・フォリー／イリス・ベルベン／ズニー・メレス／アマンダ・ウォーカー

みどころ

あらゆるセレブを乗せた豪華客船が無人島に漂着。頂点に君臨したのは、サバイバル能力抜群な船のトイレ清掃係だった―。映画はアイデア勝負だから、なるほど、これは面白そう！

そう思ったが、第１章ではファッション業界の売れっ子女性モデルと、しがない男性モデルとの“ある論争”風景が長々と描かれるので、それに注目！これは一体ナニ？さらに第２章では、大富豪たちの、金をめぐるそれぞれ独自の議論に続き、ド派手なゲロのシーンから、第３章では、難破、漂着と物語が進むのでビックリ。

本作の邦題は『逆転のトライアングル』だが、原題は『Triangle of Sadness』。これは一体ナニ？本作のキテレツな面白さを堪能するためには、その意味の探求が不可欠だ。さらに、あえて尻切れトンボにされている（？）、あっと驚く本作ラストの意味も、観客一人一人がしっかり考えたい。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■カンヌの最高賞を２作品連続受賞！３度目は？■□■

黒澤明監督やスピルバーグ監督は世界的巨匠だが、あなたはスウェーデンの鬼才リューベン・オストルンド監督を知ってる？私が彼の名前を知ったのは、『フレンチアルプスで起きたこと』（１４年）（『シネマ３６』１１９頁）を観た時。その評論で、私は、「スウェーデンの新星リューベン・オストルンドに注目！」の小見出しをつけ、「今回は、そのスウェーデンで『２０１５年観るべき映画監督TOP１０』（variety誌）に選出された、１９７４年生まれの若手監督リューベン・オストルンドに注目！」と書き、さらに、「同監督の長編第４作目となる本作は全米を席巻し、外国語映画賞最多１５冠受賞に輝いたらしい。つまり、北欧から世界の映画シーンへと躍り出たリューベン・オストルンド監督が、本作で日

本初上陸を果たしたわけだ。本作の鑑賞については、まずはそんなスウェーデンの新星リューベン・オストルンド監督に注目！」と書いた。

同作は、第６７回カンヌ国際映画祭の“ある視点部門”審査員賞を受賞したが、続く『THE SQUARE ザ・スクエア 思いやりの聖域』（１７年）（『シネマ４２』７７頁）は、第７０回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞をゲット。それだけでもスウェーデンの若手監督リューベン・オストルンドが世界の巨匠に仲間入りしたことが証明されたが、続く本作では、『THE SQUARE』に続いて、第７５回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を連続受賞したからすごい。

過去、カンヌ国際映画祭でパルムドール賞（最高賞）を２度受賞した監督は、今村昌平監督をはじめ、彼が７人目。またそれを２作品連続で受賞した監督は彼が映画史上３人目だ。しかして、『逆転のトライアングル』と題された本作のテーマは？その面白さは？

■□■テーマはあっと驚く大逆転！物語は無人島への漂着！■□■

１章、２章、３章と分けられた本作は、パンフレットに詳しいストーリーが紹介されているが、要約した本作のストーリーは、「あらゆるセレブを乗せた豪華客船が無人島に漂着。頂点に君臨したのは、サバイバル能力抜群な船のトイレ清掃係だった―。」というもの。また、チラシには、「カンヌ国際映画祭パルムドール２作連続受賞　なのに超ブラックな衝撃作！！狂った時代を、笑い飛ばせ。」「この転覆劇、あなたは笑えるか？！ブラックユーモア満載で贈る世紀の大逆転エンタメ！」の文字が躍っている。

「織田信長は女であった」という“あっと驚く逆転劇”の発想で物語を組み立てた佐藤賢一の小説とフジテレビのドラマ『女信長』（１３年）は面白かった。また、NHKの「ドラマ１０」では現在、男女逆転の“大奥”を描いた『大奥』（２３年）が大ヒット中だ。それに対して、本作の逆転劇は、豪華クルーズ船が無人島に漂着したことによる、支配階級と非支配階級の逆転劇。マルクスの『共産党宣言』（１８４８年）は資本家階級と労働者階級の対立を、資本の観点から理論化し、その階級対立は絶対的なものと規定したが、それはヨーロッパ本土においてのもの！無人島に漂着した状況では、それはどうなるの？

世界的に有名な『ロビンソン漂流記』は、無人島に漂着したたった一人の男が独力で生活を築いていくたくましさが興味深かったが、そこには何の逆転劇も存在しなかった。それに対して、同じ“漂流モノ”ながら、逆転をテーマにした本作の逆転劇の面白さは？

■□■第１章に見る、男女２人のモデルからの問題提起は？■□■

本作の物語は前述のとおり、漂着した無人島での逆転劇。そう思っていたのに、本作は上半身裸の男性モデルたちの品定め風景に始まるからアレレ。これは一体ナニ？私はこんな男性モデルの世界に全く興味がないが・・・。

さらに続いて第１章で登場するのは、高級レストランで食事を終えたばかりの若い男女の姿。そこでは「ありがとう。ごちそうさま」と恋人のヤヤ（チャールビ・ディーン）に言われて憮然とするカール（ハリス・ディキンソン）の姿が映し出される。２人ともファ

ッションモデルだが、ヤヤは超売れっ子で、カールの何倍も稼いでいるらしい。ところが、レストランの食事代は男が払うのが当然という態度のヤヤにカールが疑問を呈すると、スクリーン上は激しい言い争いになってしまうから、アレレ。「男女の役割分担にとらわれるべきじゃない」とカールは必死で彼女に気持ちを伝えようとするが、なかなかそれは難しいようだ。何もそこまでのケンカをする必要はないだろうと私は思うのだが、トコトン論理的に突き詰めなければ気が済まないタイプのカールと、そんなカールの気持ちが全く理解できないヤヤとの間の溝は深いようだ。しかして、リューベン・オストルンド監督が第１章で長々とそんな２人の男女モデルの会話シーンを登場させたのは何のため・・・？

■□■豪華客船クルーズの客筋は？船内のヒエラルキーは？■□■

第２章は第１章とは一転して、豪華客船クルーズの旅に、見事なプロポーションの長身にファッショナブルな服をまとったヤヤと、それに付き添うカールが乗り込むシーンから始まる。これは、インフルエンサーとしても人気者のヤヤが豪華客船クルーズの旅に招待されたため、カールも写真撮影係のお供としてヤヤに同行したらしい。２０２０年１月～６月、横浜港に停泊したクルーズ船、ダイヤモンド・プリンセス号内で起きた新型コロナウイルスの集団感染騒動は強く記憶に残っているが、本作に見る豪華客船クルーズの料金は間違いなく、その数百倍。

ちなみに、フランス革命前の“アンシャン・レジーム”と呼ばれる旧制度下のフランスは、第１身分・聖職者、第２身分・貴族、第３身分・平民、という３層ヒエラルキーだった。また、マルクスは資本家階級 VS 労働者階級の２層に分析した。それに対して、本作に見る、豪華客船クルーズ内のヒエラルキーは次の通りだ。

第１階層、世界トップクラスのセレブ階層の乗客。

第２階層、セレブ客をもてなすクルーズ船のスタッフ。

第３階層、料理や清掃を担当する、最下層の有色人種の裏方スタッフ。

本作第２部では、まず第２階層である客室乗務員トップの女性ポーラ（ヴィッキ・ベルリン）が、全スタッフを集めた部屋の中で「高額チップのために、金持ちたちのどんな要求にも応えよう！」と発破をかける風景が描かれる。女性スタッフたちのミニスカート姿はあまり似合うように思えないが、それもセレブな乗客へのサービスの１つだから、少なくともその心意気は買いたい。しかして、彼女らの高額チップ獲得のための徹底したサービスぶりは？

続いて登場するのが、わがまま放題の超セレブなクルーズ客の面々。その第１は、最初にヤヤとカールの２人に話しかけてきた、ロシアの新興財閥“オリガルヒ”の男とその妻だ。有機肥料でひと財産築いたと語る男は「私はクソの帝王」と笑っていたが・・・。第２は、ヤヤに写真を撮ってもらっただけで、「お礼にロレックスを買ってやる」と言う「会社を売却して腐るほど金がある」とのたまう男。第３は、上品で優しそうな英国人老夫婦で、武器製造会社を家族経営している。彼らは国連に地雷を禁止されて売り上げが落ちた

時も、「夫婦愛で乗り切った」と胸を張っていた。その他、豪華クルーズ船のセレブ客は、どれもこれも嫌な奴ばかり・・・。

ヤヤはそんなセレブたちからも一目置かれる目立った存在だが、自分の金でクルーズ客になっているわけではないから、やはり第１階層の人々とは少し異質。ましてや、その付き添いに過ぎないカールはとても第１階層とは言えないから、その立場は微妙だ。

他方、第３階層の人々は第２部では全く姿を見せないが、本作ではそれがミソ。第３部では突然、その中の１人である、トイレの清掃係の女性アビゲイル（ドリー・デ・レオン）が、あっと驚く存在感を！

■□■船長主催のディナー風景に注目！遂に難破、漂着！■□■

第２章最大のハイライトは、船長が乗客をもてなすキャプテンズ・ディナーの風景になる。これは、アルコール依存症で朝から晩まで船長室で飲んだくれていたために延び延びになっていた予定のイベントを、ポーラが強引に説得して開催に漕ぎ着けたもの。正装を整えた船長の外見は立派なものだが、体の中はなおアルコール漬け状態らしい。

本作におけるキャプテンズ・ディナーのみどころは、次の３点だ。第１は、超セレブ客向けの豪華クルーズ船のキャプテンズ・ディナーに見る豪華料理の数々。全世界が食糧不足に苦しむ中、そこでの料理はキャビアにウニにトリュフと高級食材を、これでもかとぶち込んだものばかりだから、その豪華さに注目！第２は、いつの間にか嵐の中に突入した船が激しく揺れる中、船酔いが続き、次々とド派手にゲロする人が続出すること。大金持ちでも貧乏人でも、船酔いでゲロする姿は同じだから、昨日まで大口ばかり叩いていた、あのじいさん、あのばあさんが次々とド派手にゲロしていく姿は圧巻！第３は、パーティーでのサービスを放棄して船内放送のマイクを握った船長が、何と「共産党宣言」を読み上げることだ。大金持ちを乗せたクルーズ船の船長が何と共産主義者だったとは！

豪華客船「タイタニック号」の沈没はちょっとした偶然の事故だったが、大嵐の中、大混乱に陥ったクルーズ船が、通りがかった海賊に手榴弾を投げ込まれ、遂に難破してしまったのは、偶然の事故ではなく、明らかにこの船長による人災だ。『オールド・ボーイ』（０３年）（『シネマ６』５２頁）や『親切なクムジャさん』（０５年）（『シネマ９』２２２頁）等で観た韓国のパク・チャヌク監督のどぎつさやエロ度、グロ度も相当なものだが、本作中盤のキャプテンズ・ディナーに見るド派手なゲロシーンは特質ものだ。第１章と第２章を通して再三語られる、カネとクソを巡る生々しい議論と共に、リューベン・オストルンド監督独特のどぎつさとブラックユーモアをたっぷりと味わいたい。

■□■漂着した無人島での君臨者は？この大逆転に注目！■□■

現在、中国では、「私がこの島を購入しました！」と叫びながら、無邪気に海辺を走り回る少女の姿がSNSを賑わしている。沖縄県にある屋那覇島という無人島の中国人への売却は、２０２１年６月にやっと制定された「重要施設周辺及び国境離島等における土地等の利用状況の調査及び利用の規制等に関する法律」（略称：重要土地等調査法）上の大問題だ

が、本作で難破したクルーズ船が辿り着いた島は誰のもの？この島が無人島だということは、徐々にわかってくるが、島に流れ着いたヤヤとカール、客室乗務員のポーラ、機関士のネルソン、そして数人の大富豪たちは、第３章ではどうなるの？

ロビンソン・クルーソーは漂着した島でたくましいサバイバル能力を発揮したが、本作でその役を演じるのは、トイレ清掃係のアビゲイルだ。カールたちが流れ着いた浜辺で呆然としている中、アビゲイルが乗った救命ボートが辿り着いたのはラッキー！豪華客船クルーズ客から一転して“漂流者たち御一行様”になってしまった男女は、ボートの中に収まっていた水とスナック菓子で空腹をしのいだが、当然それはすぐになくなってしまうものだ。そんな中、アビゲイルが発揮した意外なサバイバル能力は、第１に海の中のタコを器用に捕獲したこと。第２に、人間が生きていく上で不可欠な火を起こし、そこでタコをさばいて調理したことだ。これはすごい！君はえらい！“上から目線”でそう言っていたのも束の間、アビゲイルから配給されたタコ１切れを食べ終わった男女が、その直後に目にした大逆転、大革命は、「ここでは私がキャプテン」と宣言するアビゲイルの絶対的権力を認めなければ、タコの２個目のお代わりにはあり付けないと宣言されたことだ。その結果、それまで“我が世の春”を謳歌していたクルーズ船の乗客たちは、いとも簡単にアビゲイルの軍門に降ることに。それまでのヒエラルキーを大逆転させたアビゲイルは、以降、無人島における絶対女王として訓臨し続けていくことになったが・・・。

■□■若いカールは夜伽役も！女の魅力とは？絶対権力とは？■□■

議会制民主主義国の日本では、国会で選ばれた内閣総理大臣が絶対的権力者だが、大統領制をとる米国等に比べてもその権力感は弱く、存在感は薄い。現在、NHK で放映中の『大奥』における将軍に比べても、その権力基盤の弱さは歴然としている。それに対して、昨年２月２４日にウクライナ侵攻を決行したロシアのプーチン大統領の権力は強そうだが、ひょっとして、それも北朝鮮の金正恩と同じような“張り子の虎”・・・？

そんなこんなの世界の実情に照らすと、無人島におけるアビゲイルの女王様としての絶対的権力はかなりのものだ。その最たるものが、それまで名声でも収入でも圧倒的な差異があったためヤヤに対していつもペコペコしていたカールが、今ではアビゲイルの従順な召使い兼夜伽役に収まっていること。こんな逆転劇を見れば、食について絶対的権力を握るアビゲイルのすごさを実感することができる。もちろん、ヤヤはそんなアビゲイルにもカールにも不満いっぱいだが、ここではそんな素振りを見せてはダメ。カールが喜々として（？）アビゲイルの夜のお相手を勤めていることに、ヤヤは女としての嫉妬心すら覚えていたが、根が利口なヤヤはそれをおくびにも出さず、アビゲイルの従順な部下を装って生き続けていた。もちろん、“女の魅力”としては、ヤヤの方がアビゲイルより圧倒的に上。しかし今、この無人島の中での“女の魅力”は、権力と一体になっているアビゲイルの方が圧倒的に上だから、若い男性モデルであるカールがヤヤから離れてアビゲイルにつくのも仕方なし・・・？そんな“逆転劇”の中、あらためて、女の魅力とは？絶対的権力とは？

をしっかり考えたい。

■□■原題は？その意味は？結末を如何に解釈？■□■

本作の邦題とされている『逆転のトライアングル』はわかりやすいように思えるが、そこでの“トライアングル”とは一体ナニ？それは、マルクスが唱えた資本家階級 VS 労働者階級という２つの階級対立ではなく、本作の豪華クルーズ船内で形成されている前述の３つのヒエラルキーのことを指すとしか考えられない。船内の絶対的秩序を保っていた、この三層構造のヒエラルキーは無人島に漂着すると一気に崩壊し、最下層だった有色人種の裏方スタッフで清掃係のアビゲイルが絶対的権力を握るという逆転劇が生じたため、『逆転のトライアングル』という邦題が生まれたわけだが、それはそれなりに、実にピッタリ。

それに対して、本作の原題は、『Triangle of Sadness』だが、これは一体ナニ？パンフレットにあるリューベン・オストルンド監督インタビューによると、「これは美容業界で使われる用語」で、「人間の眉間のシワのこと」を言っている、そうだ。そして、これはスウェーデンでは、「トラブルのシワ」と呼ばれており、人生には悩み事がいかに多いかを表すものとされているらしい。彼は、あるパーティーの席で外科医がある女性に、「おや、あなたにはとても深い“悲しみの三角形（Triangle of Sadness）”がありますね・・・でも、私なら１５分あればボトックスで治せます」と話しかけていたエピソードを聞いて、現代におけるルックスへの強迫観念について、そして、心の充実度がある意味では後回しになっている、ということを物語るエピソードだと思ったそうだ。なるほど、なるほど。

そんな体験は私にもあるが、リューベン・オストルンド監督がすごいのは、そこから得たアイデアを脚本に書き、映画化してしまうこと。なるほど、私には本作第３章のストーリーにしか興味が湧かなかったが、本作第１章で長々と描いていた男性モデル業界の実態や、ヤヤとカールとの力関係の差（名声と収入の差）にはそういう意味があったわけだ。

しかして、本作ラストは如何に？ロビンソン・クルーソーは長い漂流生活の後、母国に帰ることができたが、アビゲイルが絶対的女王として君臨しているこの無人島にも救援の船がやってくるの？またロビンソン・クルーソーは長い漂流生活の中、島をあちこち探検し、さまざまな新発見をし、新収穫を次々と得ていたが、それは日々、数名の男女の食糧を確保しなければならないアビゲイルも同じだ。ある日、たまたま男たちが発見したヤギを捕獲し、たらふくその肉を食べることができたのは素晴らしいが、そんなことが続けば無人島での権力が男たちに再移転してしまうこと確実。しかして、ある日、ヤヤと２人で島の頂上まで探検したアビゲイルは、廃墟となったエレベーターを発見したことによって、この島はかつて巨大なリゾート施設があったことを確認したが、その後２人で一休みしている時に起きた本作ラストの展開とは！本作は、その場でさっと映像が真っ暗になるが、これはリューベン・オストルンド監督が、あえてその場で何が起きたのかを観客に見せず、一人一人の観客の解釈に委ねたためだ。さあ、あなたはこの結末を如何に解釈？

２０２３（令和５）年３月７日記